第１１章

金　　融

第 11 章　金　融

概況

1980 年代後半の「バブル景気」はその後 90 年代に入ると、株価に続いて地価も急速に下落し、経済は大きく混乱した。いわゆる「バブルの崩壊」である。

これに対して、政府は金融機関に対し公的資金を投入し、資本の増強を図ると同時に公共事業の大幅な拡大、減税等の緊急経済対策を実施した。

2000 年以降、一時的な欧米の景気拡大、アジア経済の回復に伴う輸出の増加に加え、企業収益の改善や情報化への対応に伴う企業の設備投資の拡大もあって全体として緩やかな改善が続いたが、依然として消費需要は低迷し、景気回復は力強さに欠ける時期があった。

2004 年は、生産が年前半にやや悪化したが、アテネオリンピックの開催や猛暑などで、年後半を中心に好調に推移し、特に全体の約 6 割を占めるアジア向けの輸出は、過去最高額を更新した中国向けで 6 年連続、2 桁増のアジアNIEs 向けでは 3 年連続で増加した。その他、アメリカ向けが 6 年ぶりに、中東向けも 2 年ぶりに増加に転じるなど、全体では 3 年連続の増加となった。

2005 年は、生産・出荷が横ばいで推移し、在庫も年後半にかけて積みあがったものの、2004 年同様にアジア向けの輸出が良好だった。特に過去最高額を更新した中国向けが 7 年連続で、アジアNIEs 向け、ASEAN 向けがともに 4 年連続で増加した。

2006 年は、個人消費は低迷したものの、2005 年と同様に輸出が堅調に推移、設備投資も増加基調で推移し、また、求人倍率や失業率も改善が続くなど、2005 年に引き続き回復基調となった。

2007 年は、輸出が前年に引き続き堅調に推移し、設備投資は一巡感が広がる中、ほぼ前年の水準を維持した。雇用も秋以降、一服傾向がみられたものの、おおむね改善が続いた。

預金・貸出金

平成 19 年度末の府内の預金残高（信用金庫の計）は、5 兆 7404 億円（対前年度比 1.7%増）で 2 年連続の増加となった。

一方、平成 19 年度末の府内の貸出残高は、3 兆 5273 億円（対前年度比 0.8%減）で減少に転じた。

手形交換高

平成 19 年中の府内の手形交換高は、1800 万 3 千枚、金額にして 44 兆 3661 億円となった。

交換枚数は、昭和 55 年以降減少傾向を示しており、本年も前年比 7.8%の減少となった。交換金額でも、平成 3 年以降は減少傾向を示しており、本年も前年比 6.1%の減少となった。これらの傾向は、全国的にみても同様である。

不渡手形については、枚数が前年比 8.7%の減少、金額が 25.2%の減少となった。

取引停止処分については、件数が前年比 2.6%の減少、金額が 8.8%の減少となった。

生命保険

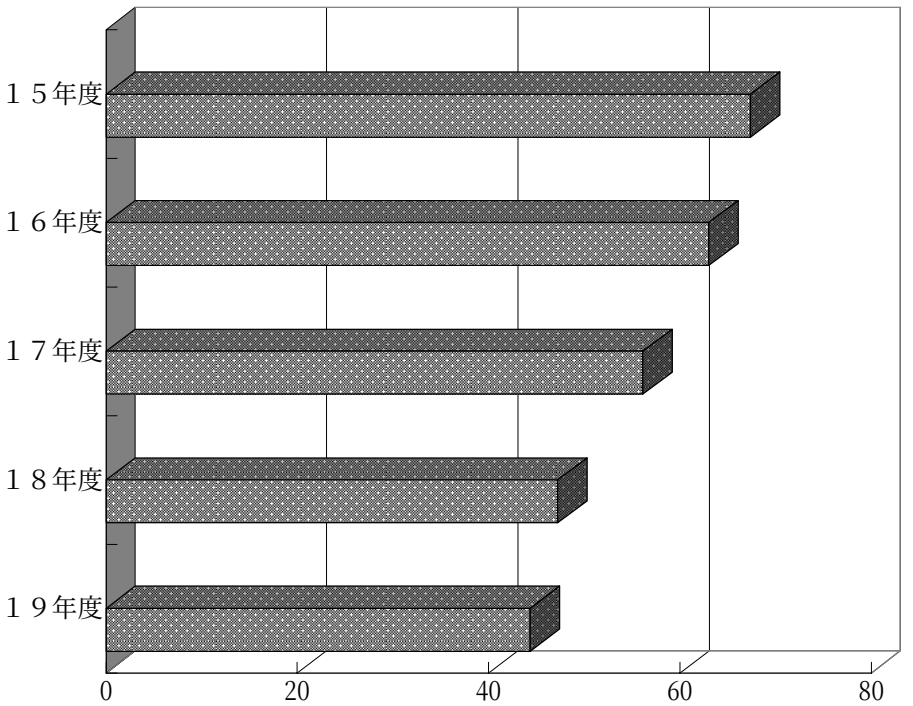
平成 19 年度は、新契約件数が前年比 40.8%の減少、保有契約件数は前年比 3.4%の減少となった。

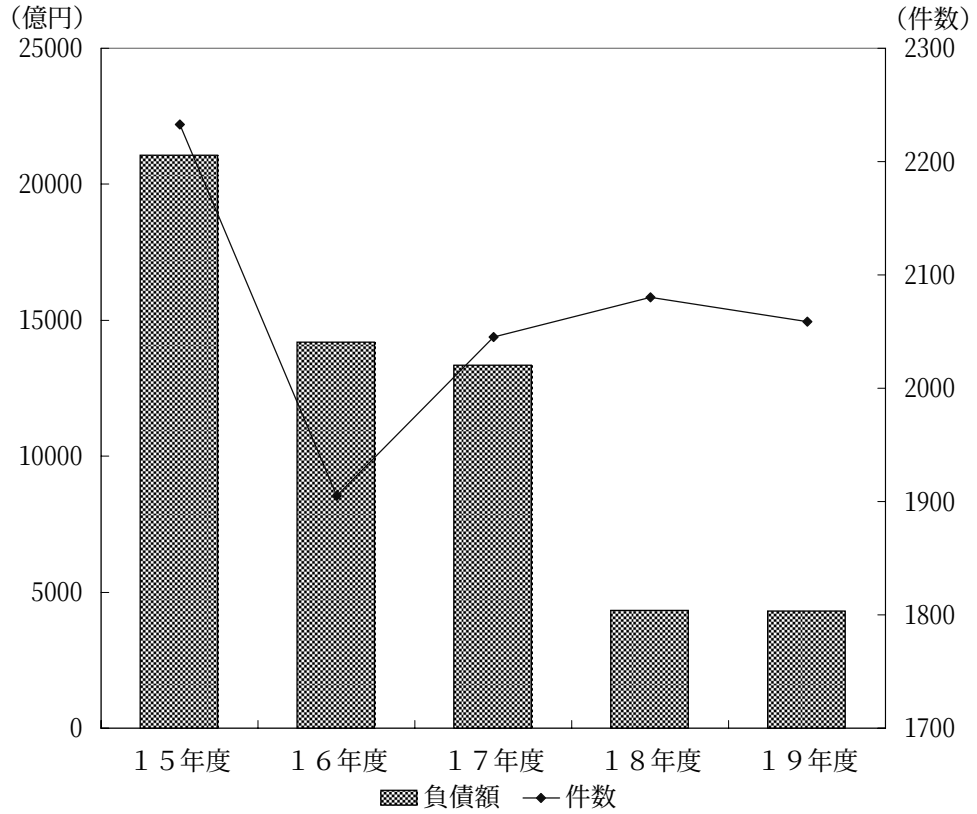
企業倒産

平成 19 年の府内の企業倒産件数は、2059 件（前年は 2080 件）で、前年より減少した。

負債額は、4301 億 97 百万円(前年は 4330 億 55 百万円)と減少した。

手形交換高の推移（大阪）



※数値は大阪の交換高である。　　（兆円）

企業倒産件数と負債額の推移